新任の先生方よりメッセージ

帰郷

部尚孝

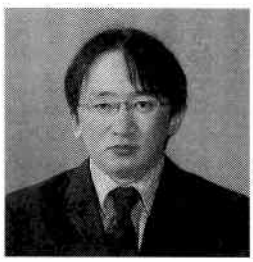
やっと帰って来ました。私にとって不変なものと新しく生まれ変わったものが混沌と融合している世界が下館一高でした。最初に思い出したことはトイレが相変わらず多いこと。以前からワンフロアーに男女四つのトイレは多すぎて清掃が大変と薄々気にはしていましたが、なんと今は一つ増えている。またボクシングのリングが姿を消して新しいフローリングになっている。しかし、パン屋のおばさんは多少お年を召したかなと思うけれど、当時のまま接してくれるし、グランドや野球のバックネットは見覚えのある光景です。やはりここは、二十九年前に教員としての私を生み、時には厳しく時には慈雨を降り注ぐごとく、十年にわたって育んでくれた母親にほかなりません。

再赴任までの心情は、放蕩息子が旅の終わりに母親の甘い胸元を目指して歩を進めるものに似ているかと思います。採用試験を終え、最初の面接に来たときには本校がどこにあるかも分からないほど無知で、水戸線から見える校舎を目指して来いということでした。たどり着くと今はないV字型の校舎の正門で、当時教頭だった大高先生が冷たい雨の中、傘をさして出迎えてくれたことが思い出されます。旧校舎の廊下はよく磨かれて黒檀のように黒光りし、多くの生徒がこの学舎から巣立ったんだということを実感させるものでした。しかし歴史と老朽化は同義語のようで、取り壊される時には、叫び声のような音を立てながら、たやすく崩れ落ちる旧校舎を複雑な思いで見ていました。その校舎跡には現在特別棟と紫西会館が建っていますが、これさえも竣工してから随分な時間が経過してます。

校舎だけではなく時間の経過を痛感させられることがいくつかありますが、その一つは教え子が中堅の教師としてばりばり活躍していること、また生徒が「私の母も教わったそうです。」などと声を掛けてくることです。こう言われると、今よりも更に未熟だった私が教師面をして教えていたなんてと、穴があったら入りたいし、穴の中でも顔から火を出す思いです。ともあれ、自分の時間だけがゆっくりと動いていると錯覚している私の周りの実時間は、着実に時を刻んでいたのです。改めて、徒らに馬齢を重ねた自身を恥じ入り、果たして本校のために微力ながらでも貢献できるのだろうかと不安に駆られました。そして危惧は的中し、久しぶりに受け持ったクラスの担任としての責務も十分に果たせずにもがき続けているのが現状です。新任の頃は年齢差もさほどないことから、生徒たちと同じ感受性で同一の平面に立っていました。今は見えない段差ができてしまい、私が一段降りて生徒側に近づくのには年齢からくる「照れ」が邪魔をし、また生徒が上がってくるほどの親密さは一年足らずの時間では形成されないようです。このように、今は五里霧中で手探りで匍匐前進している私ですが、霧はいつかきっと晴れることを信じ、残り少ない教員生命を、叱咤し見守ってくれた母である下館一高に捧げたいと思っています。

下館一高に赴任致しまして

大吉悟（七十二回卒）



私が下館一高に赴任致しまして、はや一年が経過しようとしております。昨年度、本校に赴任することが決定した折から、現在まで非常に充実した教員生活を送っております。十一年ぶりに戻ることが出来た母校。それも、教員として…。夢にも思うことができませんでした。

本校に赴任いたしまして、そこには変わらぬ生徒の姿がありました。文化祭や館力祭などに自主的に活動する姿。真剣に耳を傾け一字一句も逃さず、ノートに書きとめていく授業中の姿勢。放課後も遅くまで、体育館、グラウンドに木霊する部活動に真剣に取り組んでいる生徒の声。

さて、そのような大変に素晴らしい能力を抱いている生徒の皆さんに、私が一つだけ望むことがあります。道徳心です。私は、前任校で道徳教育を担当しておりました。今年度から、茨城の総ての県立学校では、道徳教育が実践されておりますが、前任校では、その道徳教育の先駆けとして、先行して行ってまいりました。おそらく、昨今、青少年の非行問題や規範意識が叫ばれている結果、高校でも道徳を実施しなくてはならないということだと思いますが、そのついでとして私なりに道徳心や規範意識の低下を考えてまいりました。

そこで、自分なりに結論を得ることが出来ました。私たちは、自分なりに誰しもが、内面に何ほどかの価値基準、判断の前提となるもの（常識）があり、それに則して行動しておりますが、自由という価値が絶対化してしまい、それまでの信じられてきた価値や常識が相対化された結果、何を善悪の基準としていいか分からなくなったのが、現在の高校生であり、日本人の姿であろうと考えます。

自分の中の正しく生きるための判断基準となるもの、それは、伝統や歴史からくるものと考えられます。私自身、下館一高で学んできたこと、諸先生方から教えを受けてきたことが私の基盤や内面を為しております。その下館一高で培ってきた経験を、今度は生徒に伝えて伝統のある下館一高を愛せるように、誇りに思えるように、微力ながら全力で一所懸命尽くす所

存であります。何卒宜しくお願い致します。

下館一高に赴任して

久保田 玲子

赴任してまもなく一年が経とうとしています。

当初は生徒数の多さやカリキュラムの違いなどに戸惑いを感じましたが、現在はすっかり慣れ、充実した日々を送っています。教科指導に思う存分打ち込むことができる恵まれた環境に喜びを感じています。

下館一高と言いますと部活動の活躍や俳句甲子園など文武両道の県西でも名高い進学校であり、同じ筑西市内の明野高校に勤めていた私にとって憧れの学校でもありました。

噂に違わず生徒たちは優れた能力をもったすばらしい生徒ばかりです。それは学習面ばかりではありません。生活面でも基本的な生活習慣が身についており、よりよく高校生活を送ろうとする姿が印象的です。特に七曜祭、クラスマッチなどの行事では、普段の授業では見せることのない生き生きとした姿を見ることができました。

しかし前向きな生徒ばかりかというと違うように思います。服装の乱れや挨拶ができない生徒もごく少数ですが目につくことがあります。

私が大事としている言葉に「自律」と「挑戦」いう言葉があります。自らを律して自分を高める努力を怠らず、様々なことに挑戦する。高校時代は人生においてごく短期間かもしれませんが、この期間にした努力や経験が今後の人生の方向性を定め、支えることもあります。自分の殻に閉じこもることなく可能性を広げ、様々なことに挑戦して欲しいと思います。

最後に生徒の皆さんの進路実現に少しでも役に立てるよう精一杯努力したいと思っておりますのでよろしく御願いいたします。

下館一高に赴任して

高野 良則（五十九回卒）

生徒が体育館で肩越し回旋の練習をしているのを見て、改めてなつかしさを感じました。

こちらに赴任し、多くの先生方の御指導を受けながら、早くも一年がたとうとしています。母校への転勤が決まった時は、来るのが楽しみであり、また不安でもありました。

学校の様子は卒業時とさほど変わっておらず、違っているのは正門の位置、紫西会館、部室棟くらい。体育館の更衣室は、当時バレー、バスケットの部室で、自分の使っていたロッカーの落書きまでそっくりそのままでした。放課後、グラウンドがサッカー部、野球部の部員でいっぱいになる様子も変わらない。現在多くの学校で部活動加入率が下がっている中、この光景には驚かされました。在学当時、放課後の部活動をやるためだけに通学しているような感じではありましたが、高校生活の三年間は私にとってすばらしい、また充実した時間でした。今の職業に就いたのもこれが理由といえるでしょう。

こちらに来て本校生徒に持った印象はいろいろありますが、特に感じたことは生徒の自主性です。勉強ができればいい、テストの点数さえ取ればいいという単なる点取り虫はどの学校にもいますが、勉強以外の学校行事や部活動、係活動などでも自分がやらなければならないという、意識の高い生徒が非常に多く、いつも感心させられます。そして色々な点で勉強になります。後輩に対するひいき目な見方と言われるかもしれませんが、いくつかの学校を見てきて改めてそれを感じます。文武両道であれとよく言われます。しかし、オールラウンドプレーヤーを達成する必要はないと思います。勉強に運動に趣味に、様々なことに積極的にチャレンジし、この青春を謳歌してほしいと思います。そしてそれに対して自分自身教員として、各生徒がすばらしい高校生活を送る一助となれば幸いです。

教員となって初めて、大声で生徒を怒鳴りつけることのない一年を送れそうな気がします。どうぞよろしくお願いいたします。

下館一高に赴任して

菊地 律省

下館一高に赴任して、もうすぐ一年になろうとしています。四月、新しい環境のもとでスタートしてから一年になると思うと、時間が経つ早さを感じます。戸惑いながら日々の生活に追われてきましたが、今まで穏やかに過ごすことができたのは、周りの先生方や生徒に恵まれたおかげだと思っています。

まず、生徒達の印象は、物事に落ち着いて取り組むことができる人が多いということでした。学習と行事でのめりはり・けじめをつけることができており、特に行事において周りと協力し、自主的に楽しみながら作り上げていく姿には、感心しました。また、学習に集中する雰囲気、環境がそろっており、このような生活環境のもとで高校三年間を過ごすことができるのは幸せな事だと思います。

高校時代は、頭も心も柔らかく、いろいろなことがどんどん吸収できるときです。日頃、生徒から「忙しくて時間がない。」という言葉を聞くことがあります。しかし、生徒達を見ていると、それは毎日の生活が充実しているということでもあるのではないかと思います。楽しいことをしているときや充実しているときほど、時間は早く感じるものなのかもしれません。自分自身の高校時代を振り返ってみても、「あわてず・あせらず・あきらめず、今できることから始めよう」と自分に言い聞かせながら過ごしていた記憶があります。

現在、日々成長してゆく生徒の姿を見ながら、このような場に自分が関われることをとても嬉しく思います。

これからも、生徒達とともに自分自身が少しでも成長できるように日々努力していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いします。

「木は光をあびて育つ 人は言葉をあびて育つ」

的場浩子

「一年を思うものは
花を育てよ
十年を思うものは
木を育てよ
百年を思うものは
人を育てよ」

という言葉があります。人を育てるためには長い時間がかかるということなのでしょう。また、人は生涯成長し続けるものであるとも言えます。答えを急ぎ過ぎず、生徒の現状を見つめつつ、これからの成長に必要な栄養分を十分に吸収できるようにしなければなりません。

それでは、成長の糧となるものは何でしょうか。

「木は光をあびて育つ　人は言葉をあびて育つ」

これは、今注目されている、堀川高校（京都）の荒瀬克己校長の言葉です。いい言葉、正しい言葉を浴びて育つかどうかが成長につながる、本当の食べ物（糧）になるということです。私たち教師が適切な言葉を発することができるかどうかは、とても難しいことだと思います。私はいつも言葉足らずで、思いが生徒に伝わらないもどかしさを感じることがよくあります。

そんな私にとっても、心の糧となった言葉がありました。

「生物を理解するためには、生命への畏敬の念を持ち続けることが大切である」という、高校時代の生物恩師の言葉です。人が生涯かけて、その人なりの立派な木になることを考えるとき、高校時代は、年輪が急速に成長する大切な時期です。生徒の皆さんにもこの言葉を伝えたいと思います。

下館一高では、理科の実験や観察に対し、興味や感心を持つ生徒にたくさん出会いました。中学生向けの模擬授業で、自ら実験を手伝ってくれた生徒もいます。実験内容をよく理解し、中学生にきちんと説明している姿は自信に満ちていました。また、アサガオの研究に取り組んで、夏休みの早朝5時や6時から、大量の花の観察データをとってくれた生徒もいます。部活や勉強の合間を縫い、何回も朝8時からデータ整理や必要な勉強を、その後も重ねています。

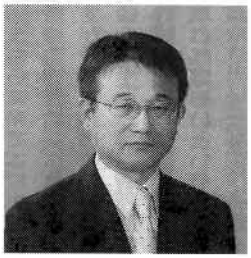
この生徒たちは、大学受験に必要な学力を身につけるだけでなく、大学入学後の学びや研究に向けた能力や姿勢を自ずと養うことになると思います。具体的に行動して、静かに思索すること、それが自己を実現するためにとても大切だからです。

授業や課外活動で、生徒たちが見せる知的好奇心を大いに感じ取り、自ら学ぶ姿勢へと育てていけるよう私自身も成長していきたいと思います。

そして、学ぶことの厳しさを通して得られる喜びがあることを共に感じ、生徒の行く先を照らす言葉を語れるようになりたいと願っています。高校の恩師の言葉が、かつての私に新たな志を示してくれた様に。

新しい学校で

日向久



寺山修司だったと思う。彼が高校時代に出会った先生の中に、旧帝大出の国語教師がいて、いつもため息をつき、ニヒリズムを漂わせていた。彼はその先生が大嫌いだったという。絶望を人前に出すことに無頓着であるだけでなく、それに侵されている自分こそが真実だと信じて疑わない鈍感さは、教育者というよりは人生の落伍者と呼ぶべきなのではないか、確かそういう内容だった。

希望を語るのが難しい時代になった。右上がりの経済の幻想はとうの昔に消え、ワーキングプアは増え続け、原油高騰による物価の上昇が庶民の生活を直撃している。親が幼児を虐待し、子が親を殺め、ネット上では個人に対する無差別の誹謗中傷が絶えず、物騒な事件が毎日世間を賑わしている。社会保険庁では何十年にも渡って横領が見過ごされ、防衛省ではトップに立つ人物が汚職の甘い汁を吸い続けた。社会的に地位の高い者が、公の立場に徹すべき人物が、自らを貶めている。

学校という場所も、そうした時代の趨勢に無関係ではない。効率という名の下に、やりたくない勉強はやらず「成績に関係ない勉強はやらず」、そうしたいからという理由で、制服と私服の区別がつかず、眠い・寒いという理由で、遅刻を繰り返す。自分の行っていることの是非を自ら判断せずに、動物のように嗅覚鋭く、長いものに巻かれる生き方。しかし、そういう生き方を望んでいるものは誰一人としていまい。ある生徒は、どんなに部活で疲れていても授業中は眠らないと決めて、時には頭を揺らしながら必死に起きている。そうするのは、普段家で長い時間は勉強できないのだから当然のこと、そして教えている先生への最低限のエチケットだと言う。ある生徒は、朝練のために毎日6時半に部室を開け、他の部員が来るのを一人部室で待っている。ある生徒は私の授業の荷物が重いと、必ず次の教室まで荷物の一部を持って行ってくれる。下館一高にはそんな生徒がいる。

私自身は、平静を装いながらも、個性豊かな集団の指導に苦慮している。目の前の生徒に跳ね返され、思うような指導が出来ないこともある。生身の彼らを見ずに、自分の理念に囚われ、厳しいだけの要求をしてしまうこともある。彼らに届く言葉を、未だに見つけられないでいる。

たまたま、帰りが遅くなった晩、校舎を出ると、部活を

終えて自転車に乗る3人が、「日向先生、遅くまでお疲れ様です。」と、後ろから大きな声をかけていった。「さようなら、気をつけて帰れ」と急いで返した声が彼らに聞こえたかどうかはわからない。いつまでも、希望を持ち続けられる人でいよう、ふとそんなことを思った。

平成十九年度 職員異動

一、退職者

校長　谷島　英一

教諭（商業）岡田　稔

講師（英語）糟谷　真希

講師（音楽）飯塚　瑞代

二、転出者

教諭（国語）菅谷　清（境高校教頭へ）

教諭（数学）飯塚　弘之（谷田部中教頭へ）

教諭（国語）高橋　教夫（明野高校へ）

教諭（理科）横手　利雄（石岡一高へ）

教諭（国語）山田三智男（水海道二高へ）

教諭（社会）市川　英樹（境高校へ）

教諭（英語）大竹　基之（下妻二高へ）

三、転入者

校長　竹井　茂雄（八千代高より）

教諭（国語）都　尚孝（水海道一高より）

教諭（国語）大吉　悟（岩井西高より）

教諭（国語）久保田玲子（明野高より）

教諭（社会）高野　良則（石岡二高より）

教諭（数学）菊地　律省（玉造工高より）

教諭（理科）的場　浩子（並木高より）

教諭（英語）日向　久（土浦一高より）

四、新採者

講師（商業）岡田　稔

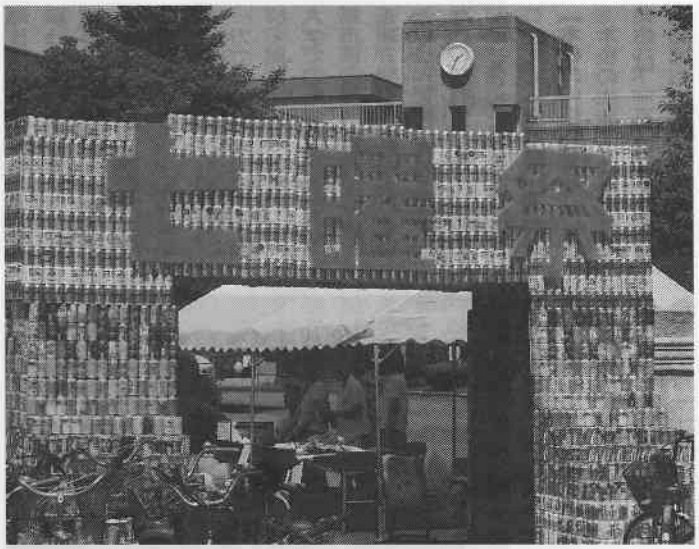
講師（英語）小曽納俊夫

講師（音楽）谷島　美佳

卒業生のみなさんへ

第八十四回卒業生のみなさん卒業おめでとうございます。今年は下館二高にとってエポックメイキングな出来事はなかったので、卒業生の皆さんにとっては、七曜祭の行なわれた年ぐらいの印象しかないかもしれませんね。しかし、卒業の年に七曜祭が行われるかどうかということは、生徒諸君にとっては、大きな問題であるわけで、つまり、七曜祭を二回出来るかどうかということに関わってくるわけです。君たちの学年は七曜祭を二度経験できた恵まれた学年ということになります。もっとも、隔年にそういう学年になるわけでどうということないよと言われればそれまでですが、高校時代は一生に一度しかないわけで、その三年間に二度出来たと言うことはよい巡り合わせに生まれた恵まれた学年と言うことです。その幸運に感謝してください。また、みなさんの学年は卒業式の予行の後、三年間の行事のダイジェスト版として作成されたDVDをみんなで鑑賞するとも聞いています。さぞかし、七曜祭の思い出がよみがえってくるのではないでしょうか。

さて皆さんは二月二十九日（金）に行われる紫西同窓会入会式において、晴れて紫西同窓会の一員となるわけです。同窓生というのはいつまでたってもいいものです。卒業後、更に親交を深め、助け合いながら生きていってください。また、時々は母校のことも思い出してください。この紫西会報に近況など報告していただけるとうれしいです。特に若い卒業生のの記事が少ないので、みなさんの投稿は大歓迎です。よろしくお願いします。尚、今年度のクラス幹事は次の通りです。幹事のみなさん何かあった時はクラスのみんなへの連絡等お願いします。



平成十九年度 紫西同窓会 幹事

全日制

一組　渡邊一彬　杉山佳与

二組　山火　武　冨田麻美

三組　相澤　如　老田裕希乃

四組　大橋　愛　小嶋美咲　堀米沙希　徳田江里

五組　糸井優太　野口健太　間々田江美

六組　深谷浩之　鈴木智裕

七組　杉山大樹　宮内莉奈

定時制

渡邊裕二　柳田恵理

〔同窓会入会式〕

今年卒業する生徒諸君の紫西同窓会入会式が、二月二十九日（金）、二時限目に挙行される予定です。

入会される諸君は、八十四回卒業生であり、その人数は次の通り。

全日制普通科二七四名

定時制普通科　十六名

従いまして、紫西同窓会員数は、二四、三九一名となります。

下館一高の進路指導の現状

進路指導部長　小川信弘

【平成一九年度入試概況】

平成一九年センター試験の志願者数は四年ぶりに増加し、全国で約五五万三千人でした。そのうち、現役が約四三万四千人、浪人が約十一万三千人、大検等が約六千人でした。受験率は九二・四％で、全教科欠席者が約四万二千人いました。総合平均点は、一八年の反動で、七科目総合(九〇〇点満点)の平均点は文系型五二五・一点(得点率五八・三％)、理系型五二九・七点(得点率五八・九％)で、文系は三九・二点、理系は四二・五点、前年より大幅ダウンしました。また、二年目を迎えた英語リスニングテスト(五〇点満点)の平均点は三二・五点(対前年マイナス三・八点)でした。こうした結果から、文系・理系とも慎重な国公立大二次出願、私立大上位校出願になったと言えます。その二次志願者数は、国公立大で約四八万九千人で、前年より約一万七千人減少しました。平均点大幅ダウンによる二次試験受験の断念、受験生総数の減少(約二・八万人)、さらには「前期日程試験のみ」移行による受験機会の縮小化、推薦・AO入試の募集人員増などが、その要因と考えられます。二次志願倍率の平均は、国立大で四・五倍、公立大で六・六倍で、国公立全体では四・八倍と、前年の五・〇倍を下回りました。日程別では、前年との差はそれほどなく、前期が三・三倍、後期は募集人員の減少が影響し九・七倍、また少数の公立大で実施される中期は一二・六倍の激戦でした。

私立大学については、センター試験の平均点大幅ダウンで、国公立大志望者の私立大への志望変更や追加併願が増加しました。また、全学部日程入試の導入、地方試験会場の拡大、センター試験利用入試導入大学・学部の増加、理工系学部の大規模改組などからも、志願者が増えたものと思われます。一方で、難関上位校と中堅校・都市部の大学と地方の大学での人気格差が拡大し、都市部の難関上位校は軒並み志願者増で、誰もが入りたいと思う大学には容易には入れないのが現状です。

(センター試験データ等は旺文社『蛍雪時代』より)

【本校生の状況】

本校の生徒(一九年三月卒業生)は、二月の自由登校の期間はもちろん、卒業後も毎日のように登校し、課外・小論文等、最後の後期試験まで諦めずに頑張りました。

五年連続の国公立大学合格者一〇〇名突破にはなりませんでしたが、それでも国公立大学合格八一名(現役七三名・浪人八名)という数字は、そうした努力あっての数字であり、よく健闘したと思います。また、私立大学合格五〇二名(現役四五九名・浪人四三名)という結果についても同様です。合格大学については後の表をご覧下さい。

【各学年の現状】

〈第一学年〉

一年生も入学から早くも一年がたとうとしています。すっかり高校生活にも慣れ、勉強や部活動に積極的に取り組む姿が見られます。高校入学がゴールではなく、高校卒業・大学進学が目標だということを、早いうちから意識させるために、年二回の三者面談やその前後の二者面談で、各自の将来の進路希望や現在の成績状況などについて、担任と話し合っています。また、一〇月一一日、生徒全員が希望で選択した七つのコースに分かれて、東京都やつくば学園都市の企業・研究所等を訪れ、職場を見学させていただいたり、業務(研究)担当者から直接お話を伺ったりしてきました。これは、将来の進路を考えるに当たって、非常に意義のある経験になったと思われます。生徒たちも熱心に説明に聞き入っていました。

＊訪問企業・研究所

朝日新聞社　近畿日本ツーリスト　日本航空　東京証券取引所(東京都)

熊谷組技術研究所　産業技術総合研究所　住友化学筑波研究所　理化学研究所　カスミつくばセンター　国土地理院　JAXA筑波宇宙センター　JICA国際協力機構筑波センター(つくば市)

現在、一年生は、二年での文理選択も決定し、各自の希望する進路の実現に向けて大きな一歩を踏み出そうとしています。

〈第二学年〉

昔から「中弛み」の学年と言われる二年生ですが、そうならないようにと、日頃から学年の先生方を中心に学習指導・生徒指導等に取り組んでいます。進路関係では、一年生のところでも書きましたが、常に生徒の状況を把握するための面談や、夏休み中の大学オープンキャンパスへの参加及びレポート提出などを行いました。一〇月三一日には、進路講演会を実施し、筑西市民会館でベネッセコーポレーションの森大輔先生をお招きして、「受験生になるために」という演題で約九〇分間の講演をしていただきました。修学旅行も終わり、高校生活も折り返し地点まで来て、いよいよ受験モードに切り換えるこの時期に、今後の受験勉強・学校生活の指針となるようなお話をわかりやすくしていただき、たいへん参考になったのではないかと思います。

また、一一月二七日には、「大学訪問」ということで、生徒全員がクラスごとに選択した七つのコースに分かれて、茨城大学・筑波大学・宇都宮大学・埼玉大学・千葉大学・群馬大学・茨城県立医療大学・埼玉県立大学・高崎経済大学といった国公立大学や、東京理科大学・芝浦工業大学・文教大学・神田外語大学といった私立大学を訪問し、キャンパスを見学したり、大学の授業を実際に体験する模擬授業を受けたりしてきました。模擬授業では、専門分野の話を高校生向けにわかりやすく講義していただけたので、興味深く臨めました。また、各大学とも研究施設や図書館の充実ぶりは、さすがに高校とは比べようがないほどでした。さらに、昼

食は「学食」を体験し、生徒たちは少しだけ大学生の気分が味わえたようです。こうした進路の行事等を通じて、生徒たちが各自の進路をより具体的に描き、その実現のためには何をすべきかが見えてくれれば、と思います。

一月の進路学習実態調査では、平日・休日の学習時間がかなり不足しています。大学受験まで一年を切っており、今からもっともっと学習に時間を充てて、受験生としてのスタートを切らせたいと思います。

〈第三学年〉

毎日遅くまで「時習館」や図書室、教室で勉強する姿が目立ちました。早朝課外や放課後の課外にも積極的に多数の生徒が参加していました。

各自がはっきりとした自分の志望校を決め、そこに合格するためには、日々努力あるのみということを三年生は認識しているようです。

十月からの推薦入試では、国公立大学合格者が十六名で過去最高の人数でした。特に筑波大学九名合格は、県内トップの人数です。また、私立大学では、指定校推薦で八名、自己推薦（ＡＯ入試）で三名、一般推薦で五名が早々と各自の第一志望校への進学を決定しています。詳しくは以下のとおりです。

国公立大推薦入試合格十六名
筑波大学　九名
埼玉大学　三名
宇都宮大学二名
群馬大学　一名
茨城県立医療大学　一名

私立指定校推薦入試合格八名
慶應義塾大学・立命館大学
青山学院大学・津田塾大学
中央大学・東京理科大学
国際医療福祉大学・東邦大学

私立自己推薦（ＡＯ入試三名
国際医療福祉大学
帝京大学・東京福祉大学

私立一般推薦入試合格五名
東北薬科大学・昭和薬科大学
東京工芸大学・文教大学
文京学院大学

一月の平成二〇年度大学入学者選抜大学入試センター試験には、本校では二五四名が志願し、推薦入試等で既に合格が決まった者を除いた二二四名が受験しました。各科目の平均点などは、後の表に記載しましたが、他校と比較しても遜色のない結果です。今後は、国公立大学二次試験対策の課外授業や小論文指導・面接練習などに取り組み、最後まで生徒・学校が一体となって努力したいと思います。

【筑西プレ・カレッジ講座】

生徒の進路選択・決定のためには、高校の授業以外のところでも、興味・関心を喚起し、そして感動を与えることが必要だと思われます。これまでも県の指定を受けて「プレカレッジ」を実施し、夏休みに大学の先生をお招きして、出前講義を行ってきましたが、一九年度からは本校独自の形で「筑西プレカレッジ」という名で、文系・理系の二コースを用意し一・二年生の希望者を対象に三日間実施しました。講義後、受講した生徒のアンケートには「驚きの連発でした。肉眼で、それも目の前で超伝導を見られたのは、貴重な体験だった。また、先生の話を聞き、何事も〈なぜ？〉を追究することが大切だとわかった。」「一つの考え方にこだわらずいろいろな観点から見て考えることの大切さがわかった。どんなに難しい問題でもすぐに他人に聞くのではなく、まずは自分で考える。解きたい、知りたいという意欲を持ち続けることが大切だ。」「機会がなければ決して学ぶことができない専門的なことを学べたので、とても貴重な体験だった。」などという感想が数多く書かれており、たいへん有意義な内容でした。講義名と講師名は以下のとおりです。（敬称略）

〈文系〉
「カウンセリングの話」
常磐大学　渡邊孝憲
「言語とコミュニケーション」
筑波大学　池田潤
「近くて遠い国―日本と中国の文化―」
宇都宮大学　松金公正

〈理系〉
「超伝導の現状と未来」
筑波大学　門脇和雄
「数理パズルで『考える技術』を磨こう！」
茨城大学　仙波一郎
「エネルギーと土って関係あるの？」
茨城大学　小峯秀雄

【文化講演会】

毎年恒例の文化講演会。これまでも各界で活躍の方々に講演をしていただき、生徒たちには将来を考える上でよい刺激を与えてきました。一九年度は、六月一二日に筑西市民会館で、出光美術館主任学芸員・荒川正明先生をお招きし、『自分の信じる道を歩む―陶芸家・板谷波山―』と題して講演をしていただきました。先生は、下館の生んだ世界的な陶芸家・板谷波山の研究者として、多くの著書を出されたり、各地で美術展の企画をなさったり、大学で教鞭を執られたりというお忙しい方です。また、下館や友部で撮影され、二〇〇四年に公開された映画「ＨＡＺＡＮ」の原作者でもあります。

今回の講演では、板谷波山の歩んだ人生についてわかりやすく説明していただきました。また、主な作品をスクリーンに映し出し、その見所についても詳しく解説していただきました。少しでも気に入らないところがある作品は自ら壊してしまうという芸術家として完璧な美を求める厳しさ、郷土を愛し郷土のために私財を投げ出してまで力を尽くしたその人間性など、板谷波山の生き方は正に映画の副題にあった「かつて美しき日本人がいた」そのものと言えるでしょう。なお、今回の講演会に際して、筑西市内の「板谷波山記念館」「下館・時の会」と笠間市の「茨城県陶芸美術館」から貴重な資料を提供していただきましたことを、ここにご披露し感謝申し上げます。

最後に、同窓会会員・保護者の方々には、常日頃から下館一高のためにご尽力いただき深く感謝しております。これからも、本校の生徒の成長のために、ご指導・ご鞭撻くださるようお願い申し上げます。なお、本校のその時々の話題・状況については下館一高のホームページに載せてありますのでご覧ください。進路指導部で年十回程度発行している中学生向けの「館一ニュース」もご覧になれます。ご覧になってのご意見・ご感想等、いただければ幸いです。下館一高のホームページのアドレスは、http://www.shimodate1-h.edu.jp/ です。（「下館一高」で検索されても、アクセスできます。）

主な大学合格者数

（年度は入試年度。現役生・浪人生を含む）

主な国立大学

大学名	19年度	18年度	17年度	16年度	15年度
帯広畜産	0	0	0	0	1
東北	2	2	0	0	2
山形	2	2	3	6	6
福島	1	1	1	5	1
茨城	21	29	29	27	29
筑波	11	16	17	10	11
宇都宮	13	8	17	21	14
群馬	2	3	4	3	3
埼玉	5	3	4	5	7
千葉	4	4	2	6	4
東京	0	1	1	0	0
横浜国立	0	0	1	2	0
富山医科薬科	0	0	0	1	1
京都	0	0	0	0	0
その他	3	14	8	12	14
国立大計	64	83	87	98	94

主な公立大学

大学名	19年度	18年度	17年度	16年度	15年度
高崎経済	2	3	1	0	1
県立医療	3	9	8	3	3
首都大東京	1	2	2	0	1
横浜市立	1	2	3	0	0
その他	10	12	15	6	9
公立大計	17	28	29	9	14

主な私立大学

大学名	19年度	18年度	17年度	16年度	15年度
国際医療福祉	20	24	17	12	11
獨協	9	13	8	15	5
文教	10	16	10	18	13
青山学院	6	6	7	7	6
大妻女子	4	0	4	4	5
北里	2	9	7	4	6
慶應	2	3	3	3	2
国際基督教	0	0	1	0	0
駒沢	11	25	4	13	15
芝浦工業	13	17	12	6	9
上智	4	0	2	1	1
専修	11	15	10	12	16
中央	8	12	7	14	8
津田塾	0	3	2	2	3
東京女子	0	2	1	2	4
東京薬科	0	1	1	1	1
東京理科	10	17	13	4	20
東洋	28	38	20	19	33
日本	25	20	20	19	32
日本女子	3	1	1	4	5
法政	17	15	9	12	14
武蔵工業	9	10	2	4	4
明治	17	14	10	13	12
明治学院	10	13	6	6	14
立教	8	9	4	0	9
早稲田	2	6	7	5	6
その他	274	350	308	213	280
私立大計	502	639	496	413	534

進路決定先人数

（現役生のみ）

年度	国公立大	私立大	短期大学	専門学校	就職	未定・他	卒業者数
19	64	162	5	9	4	32	276
18	90	150	3	6	2	29	280
17	86	156	7	12	3	53	317
16	89	124	8	10	2	83	316
15	93	143	8	19	2	56	321

2008年度大学入試センター試験平均点

科目	国語	数学ⅠA	数学ⅡB	英語	世界史B	日本史B	地理B
本校平均	126.6	68.7	50.1	120.3	59.0	71.5	61.6
全国平均	121.6	66.3	51.0	125.3	59.0	64.3	66.4

科目	物理Ⅰ	化学Ⅰ	生物Ⅰ	ﾘｽﾆﾝｸﾞ
本校平均	68.9	71.0	56.1	28.4
全国平均	64.6	64.2	57.6	29.5